



平成24年3月5日
卓話『茶の湯と金沢』
茶道裏千家今日庵 業躰部講師
奈良 宗久 様



今日は金沢とお茶ということでお話をさせていただきます。

信長はお茶の文化に政治を付け加える形で茶の湯を取り込みます。その頃の道具は唐物と言いまして中国の水墨画、青磁、天目茶碗などの宝物を並びたてるという、そういう時代です。秀吉もまたお茶をすすめ、当時の正親町天皇、後陽成天皇にお茶を献する礎を築きました。その頃台頭したのが千利休で、利休はそれまで中国のものを使っていたところから国風化、日本のものを使う侘茶に変わっていきます。備前の茶入れを使い、天目茶碗も豪華なものより少し侘びた風情のもの、部屋も広間から一客一亭しか入れない茶室に変わります。秀吉は黄金の茶室、利休は小間の茶室という具合に段々と対立するようになるわけですね。

その頃、秀吉の政権の一役を担っていた前田利家は千利休に茶を学び、秀吉とともにお茶を引き継ぎます。2代藩主の利長は利休七哲の一人で、どんどんお茶が金沢の街に浸透します。富山の高岡に瀬戸の陶工を呼び、お茶に使うものを作ったりしました。金沢でも藩の政策として茶道具などの工芸品が盛んになります。3代藩主の利常の時、特に金沢の文化が花開いたと言われています。奥様は徳川秀忠の娘、珠姫。お母様はお江です。その珠姫の妹は東福門院、後水尾天皇の奥様で、ここで加賀藩が京都、江戸と深くつながるわけです。また利常の娘富姫が京都の八条宮家、今でいう桂宮に嫁ぎまして、桂離宮を修復するに当たり前田家がかなりの寄進をしたと言われています。

徳川の世が治まるに連れ前田家も武から文に

移行していきます。京都から蒔絵師や狩野探幽の弟子を呼んだりしています。5代藩主綱紀公になるとお細工所を設け、蒔絵、金具、象がん、能面などを藩直営の工房として運営します。また文庫を作り日本、中国、朝鮮半島の書物を整備します。新井白石が加州は天下の書府なりというほど加賀に書籍、工芸品があふれる時代です。千利休のひ孫にあたる千叟宗室を京都から呼び、金沢に住まわせていますが、そのときに私たちの初代長左衛門も京都からまいりということになるわけです。

金沢がなぜここまで工芸都市になったかと申しますと、やはり茶の湯という文化の歴史がかなり深いということになります。明治になった時、東京、京都には西洋の文化が入って日本の文化が大打撃を受けたのですが、金沢は前田家の文化が色濃く残っており、日本中の当時の文化財級の道具も金沢の地にかなり舞い込んでいます。作り手ももちろんですが、金沢では多くの旦那衆もお茶を嗜みます。財産の3分の1は茶道具や書画に当てるというのが昔からの金沢の習わしといわれる所以だと思います。

お茶は生活の延長線と言われます。お茶をされれば時の移ろい、四季の移ろいも分かりますし、工芸がお茶の中には全て入っていますので、お菓子、塗り物、焼き物を楽しみながら深めていくことができます。

ありがとうございました。

